

香川県直島と神戸から「国家戦略」を考える

～地域で芽生える「想い」を育てるための支援を提供することが政府の役目～

3 月 20 日、21 日、仙谷国家戦略大臣と国家戦略室スタッフと共に「地域で国家戦略を考える」をテーマに、香川県の直島と神戸市を視察訪問した。

地域が元気になれば日本は元気になる。地域が元気になるためには、まず地域の誰かが「想い」を持って何かを始めることが大切。さらにその熱い「想い」を持ったリーダーとそれを支える住民が皆で知恵をしぼり力をあわせること。地域の持つ潜在力は地域の人々の「想い」によって芽生える。そして行政の役割は、その芽を育てていくために、規制改革や制度面での支援によって成長の障害を取り除いていくことであると再確認した。こうした地域視察で得られた成果は、6 月に向けて最終とりまとめをすすめている「新成長戦略」の参考にしていく。

直島では、美しい瀬戸内海の景観と現代アートの融合を体感し元気を頂いた。直島をもっと元気にしたいというベネッセの創業者福武哲彦氏と三宅親連町長（当時）の「想い」が、住民や訪問者に共鳴し島全体を活性化するエネルギーとなり、島をアートサイトとして進化させ、世界から観光客を引きつけている。2003 年まで年間 5 万人程度だった観光客は、2008 年には 35 万人にまで増えたという。80 代で住民のボランティアをとりまとめている高橋さんは「英語ができなくても外国人が来てくれることが楽しい。身振り手振りを交えて話している」、70 代の直島銭湯で働く土井さんは「定年を迎えてぼーっとしていたが、この銭湯の立ち上げから参加してきて毎日がとても楽しい」と、一様に生き生きと暮らす住民の皆さんの姿が印象的であった。

兵庫県においては粒子線医療センターや神戸先端医療センターを視察。行政の支援を軸に既に医療施設が整備されている。今後は、世界各国からこれらのセンターに最先端の治療を受ける患者を集めていくために、患者（お客様）のニーズに応えるマーケティングの視点を取り入れ、医療サービスと観光などをパッケージで組み合わせる「医療ツーリズム」に向けた創意工夫が必要であると感じた。

さらに阪神大震災で最も被害の大きかった神戸市長田区を訪問。地域住民とボランティアの皆さんが 2 年半がかりで築 130 年の古民家を移設し完成させた集会所で、手作りの美味しいお昼ご飯を頂きながらご苦労話を伺った。「15 年経っても震災の時のことが忘れられない」と話すように、神戸の皆さんにとって震災復興はまだ終わってはいないということを痛感した。また、技術を活かして世界に挑戦する中小企業を視察し、ソーシャルベンチャーとして事業と社会

貢献の両立を目指す方々との意見交換も行った。

「震災前への復元では他社に負けてしまう。震災後に新製品として開発したものが、現在の売り上げの7～8割を占めている」と話す地元経営者の言葉が印象に残った。過去の延長ではなく再興に向けて、新たな出発をした神戸のこうした発想こそ、今後日本が「新しい成長」に向かって進んでいくために必要な視点ではないだろうかと感じつつ視察を締めくくった。

国家戦略室長 古川 元久



香川県・直島本村地区をボランティアの皆さんの案内で視察



神戸先端医療センターでの意見交換



神戸市長田区の皆さんと

【現地日程】

3月20日（土）

兵庫県立粒子線医療センター視察

直島視察（本村地区、地中美術館、住民の皆様との対話など）

3月21日（日）

神戸港 港湾オペレータールーム視察

神戸先端医療センター意見交換及び視察

篠田プラズマ株式会社視察

長田区視察（住民の皆さんとの対話、鉄人プロジェクト等）
日本ジャバラ工業株式会社視察
ソーシャル・ビジネスに関する意見交換会（古川室長のみ）

以 上